

文献紹介

Diercke Weltatlas - 4. aktualisierte Auflage

(ディルケ世界地図帳 四訂版)

Westermann, 1996, 275S.

ディルケのアトラスと言えば、ドイツの学校用地図帳としてわが国でもつとに有名である。高校の教科書や地図帳にも、しばしばディルケからの引用が見られる。その知名度を考えれば、ここであらためて紹介の文章を記す必要もないのかもしれないが、時代に応じて少しずつ内容を変えていくのが地図帳の常であり、ディルケ・アトラス最新版の1996年版でも、旧来の版に比べてかなりの改変が見られる。以下の拙文においては、これらの改変箇所に着目しながら、ディルケ・アトラスについて紹介をしていくことにしたい。

まず、版次の説明をしておく。本書『ディルケ世界地図帳』1996年版は「四訂版」となっているが、1988年に大改訂が行なわれてからの四訂版である(それ以前の経緯については後述)。初版が1988年に出版されて以降、東西ドイツの再統一やソ連・東欧諸国などの情勢変化もあって、少しずつ修正が加えられ、二訂版・三訂版が相次いで出た(三訂版は1992年)。本書はその四訂版にあたる訳であるが、この四訂版では、三訂版までの修正に比べて、かなりの補訂が見られる(本書をあらためて紹介するゆえんである)。今、評者の手元には、1996年版とともに、1988年の初版、1992年の三訂版(ただし1995年の第4刷版)があるので、以下においては、これらの版による異同についても述べてみたい。

次に、本書の構成を示しておく(番号は評者が便宜的につけたものである)。

1. 地域別・主題別地図リスト
2. 地図入門
3. ドイツ
4. ヨーロッパ
5. アフリカ
6. アジア(旧ソ連を含む)
7. オセアニア
8. 南北アメリカ
9. 極地方
10. 世界の概観
11. 事項索引・地名索引

以上の他に、表見返しに地図の検索図が、裏見

返しに空間知覚の図がある。

構成は、見てのとおり、ドイツ・ヨーロッパから始まる地域ごとの配列で、これは初版から変わらない。基本的には、ヨーロッパを起点に西から東へ、あるいは北から南へという配列順序である。

学校用地図帳が一般の地図帳と大きく違う点がさまざまな種類の主題図であるが、ディルケの地図はいずれも芸術品と呼べるほど色鮮やかで美しく、類似の学校地図帳の中では群を抜いている。これは、ディルケの大きな魅力のひとつである。

各主題図は、最後にまとめられた世界全体の主題図類を除き、それぞれの地域の中におこまれている。この点、ディルケと並ぶドイツの学校用地図帳 *Alexander Weltatlas* (Klett 社刊) が、主な主題図を後半にかためているのと大きく違うところである。評者のかつての経験では、系統地理中心の授業ならば、アレクサンダー方式の『高等地図帳』(二宮書店刊)が使いやすいように思ったことがあるが(ただし、高校の地図帳の市場シェアは、帝国書院の『新詳高等地図』が約6割を占めている)¹⁾、個別地域の主題図の数が多ければ、各地域に主題図をおこむのも自然であろうし、ドイツにおける地理教育の内容とも関連してこよう。

各所に散らばっている主題図の検索に便利なのが主題別地図リストと事項索引で、これは日本の地図帳には見られない。たとえば、主題別地図リストで「宗教」という項目を見ると、宗教関係の地図として、世界の諸宗教やインド半島の諸宗教以外に、ベルファストの宗教紛争、巡礼都市ルルド・メッカ、ローマ、エルサレム、15~17世紀のアフリカ・イスラム世界、イスラエルとアラブ隣接国の宗教についての地図があることがわかる。同様の検索は、事項索引でも行なうことができる。

なお、歴史地理的テーマの主題図に関して付言すれば、たとえば日本の地図帳によく登場する村落形態の図はない²⁾。しかし、1840~1880年のベルリンと現在のベルリンを地図で比較したり、グレーニンゲン(Gröningen)(ザクセン州)の耕地地区画・土地利用などを1836年、1945/46年、1966年、1995年にわたって比べたり、レーゲンスブルクのローマ時代からの発展(市壁の拡大など)を図示したりするなど、現在に至る時代的変化を地図で示そうとする試みはいくつか見られる。この点は、日本の高校

地図帳よりもずっと専門的な歴史地理の内容と言えるだろう。

さて、旧版からの改変箇所を挙げると、新しく挿入されたのがドイツ地勢図(16～17頁)、シュプレヴァルト(Spreewald)(ブランデンブルク州)の土地利用図(53頁④)、それに世界の気候図(222～223頁)である³⁾。特に世界の気候区分図は、旧版ではラウアーとフランケンベルク(Lauer und Frankenberg)のものが使われていたが、四訂版ではそれに加えてケッペン⁴⁾、トルロとパッフェン(Troll und Paffen)、ネーフ(Neef)の図が3枚付け加えられている。また、108～109頁の南東ヨーロッパの図では、図郭を東にずらして、カフカス地方全域が収まるようにしている(その分、旧ユーゴの一体性が犠牲になっている)。

その他、類似のテーマで別の図に差し替えられたケース(43頁①, 59頁③, 132頁④)や、同じテーマの図でも全面的に書き直しているケース(54頁①②, 62頁)がある。また、一見ただけでは気がつかないが、主題図に使われている統計などのデータが新しいものに更新され、それに応じて地図も書き改められている場合は多い。これは、三訂版まではあまり見られなかった点である。

ここで、我々に馴染みのある日本関係の図を見ておくことにしたい。日本関係の主な主題図は、A. 東京概観図、B. 東京への通勤者、C. 神戸の埋め立て、D. 日本の産業、E. 日本の人口密度の五つである。人口・通勤者数などのデータは更新されており、新しい高速道路も書き加えられている。また、興味深いのは領土問題のある場所で、たとえば竹島は、初版(1988年)のD図では、“Take(Japan)”となっていたが、三訂版・四訂版では“Tok-To(Take)”と韓国語優先で日韓両国の呼称が記入されており、鬱陵島と竹島の間に引かれていた国境線が消されている⁵⁾。北方領土の場合も、呼称の記載に変化が見られる。ディルケ・アトラスの作成には多くの地理学者が関わっているが、巻末の協力者一覧によれば、日本関係の地図はフリュヒター(Flüchter)、金崎 肇、ヴュスト(Wüst)が責任者となっている。

ところで、恥ずかしいことに、今回この紹介文を書くために本アトラスを細かく見ていて知ったのだが、地図帳のタイトルになっている「ディル

ケ」は、この地図帳を最初に編集した人の名前である。巻末の協力者一覧の冒頭に彼の略歴があるので(ただし1988年の初版にはない)、それを紹介すると、彼は正式にはカール・ディルケ(Carl Diercke)と言い、1842年ベルリン北西の町キリツ(Kyritz)の生まれ。北ドイツ各地やりガ(現ラトビア)で教師をして、1913年ベルリンで没している。1875年以降ヴェスターマン(Westermann)の地図帳作成に関わり、1883年には高等教育用地図帳*Schul-Atlas über alle Teile der Erde*を編集している。これが本書の原型で、47版を重ねた後、1911年と1931年にパウル・ディルケ(Paul Diercke)によって、1950年と1957年にデーメル(Dehmel)によって、1974年にはマイヤー(Mayer)によって改訂された。そして、版元のWestermann社創設150年に当たる1988年に、現在の改訂版(本書初版)が出たという次第である。

本書は、内容の改変にもかかわらず、ISBNや総頁数は、1988年の初版からこの四訂版まで変わっていない。些少なことはあるが、付言しておきたい。

(小田匡保)

[注]

- 1) 田代 博(1996): 身近なアトラス 学校地図帳, 地理, 41-4, 46頁。
- 2) 手元の1957年版(ただし、その改訂第10版, 通算第98版)ディルケには、中欧の村落形態分布図とドイツの村落形態12タイプの図がある。
- 3) その他、1990年10月3日以降のドイツ行政区分図(73頁)は、三訂版に既に収録されている。
- 4) 手元の1974年版(ただし、1978年の改訂第26-28版, 通算第210-212版)ディルケでは、ケッペン・ガイガーの図が世界の気候区分図として使われている。1988年の大改訂でいったん消えたケッペンが、1996年の四訂版ディルケで復活したということになる。なお、1974年版ディルケは、中村和郎先生所蔵のものを拝見した。記して感謝申し上げたい。
- 5) 前掲4)の1974年版ディルケでは“Dogdo”と韓国語表記され、竹島の東に国境線が引かれていた。